

東国における中世後期の集落

葛飾区郷土と天文の博物館学芸員・総研大修了生

永越 信吾

松田 それでは、これより講演に移ります。最初の講演は、本専攻を二〇二〇年三月に修了した永越信吾さんの「東国における中世後期の集落」です。それではよろしくお願いいたします。

永越 皆さん、こんにちは。先ほどご紹介いただきました永越と申します。私の話ですが、先ほど専攻長からも簡単な紹介を頂きましたが、中世の中でも後半の時期です。タイトルは中世後期で、私が話をする時代は、十四世紀後半から主に十六世紀くらい、時代区分で言うところと室町時代から戦国時代にかけてになります。今回、こういった時期の集落を取り上げて、集落の形態について、話をさせていただきたいと思っています。

まず、タイトルで掲げました東国ですが、区分もそのときによって異なることもあるのですが、今回の発表での東国という地域は、上野、下野、武蔵、相模、伊豆、常陸、上総、下総、安房の諸国、おおむね現在の関東地方ですが、この地域にある集落遺跡を取り上げて中世後期の集落を

見ていきたいと思っています。

では、集落とは何かということですが、簡単に言うと人々が暮らした場、いくつかの屋敷から成ると、ここでは定義づけて話をしていきたいと思っています。屋敷という言葉を挙げましたが、これについて述べておきます。人々が暮らした居住用の建物や倉庫、そういったようなもので構成されている場所で、家屋といったものの土地を含むものとして屋敷という表現をしたいと思います。

集落というと、こういった屋敷がいくつかまとまったものと認識できるかと思います。屋敷が単体で存在した場合、これを本当に集落と言っているのかどうかという議論もあるかと思うのですが、そういった事例もありますので、話の中で紹介していきたいと思っています。

村落の領域と集落の位置付けをはじめに確認しておきたいと思っています。村落の領域を空間的に見て、その中に集落のある場所を概念化したものが図1で、主に民俗学や歴史学で既にこういった図のようなものは作られているのですが、そうしたものを参考にして、それを私なりに少しアレンジしたものをここに提示しています。

中央にある場所が集落で、人々が住んでいたところになります。その周囲に耕地、これは民俗ではノラと呼ばれているようですが、その耕地の周囲にはヤマ、あるいは海とか湖沼といったものが含まれる地域。さらには奥山、あまり人が行かないような領域、そういった空間的な位置付けができるだろうと考えています。

私が総研大で行ってきた中世集落の研究ですが、どのようなことに視点を置いたのか簡単にお

話します。まずは、屋敷分布を基にした集落形態を類型化することから始めました。なかなか全体像が見えてこない事例が多い中、屋敷と考えられる遺構の分布に着目しました。遺構と言うと聞き慣れない言葉かと思えます。

建物や井戸の跡など、遺跡を発掘するとさまざまな生活の痕跡が見つかるのですが、そういったものを遺構と呼んでいます。それらを抽出して、屋敷がどのように分布するか、そこから集落形態を考えていこうという方向で研究を進めていきました。

さらに、地形に即してどのような集落が形成されたのか、今回掲げました東国、主に関東地方ですが、関東平野という日本でも最大級の平野が広がっている地域で、集落がどういったとこ

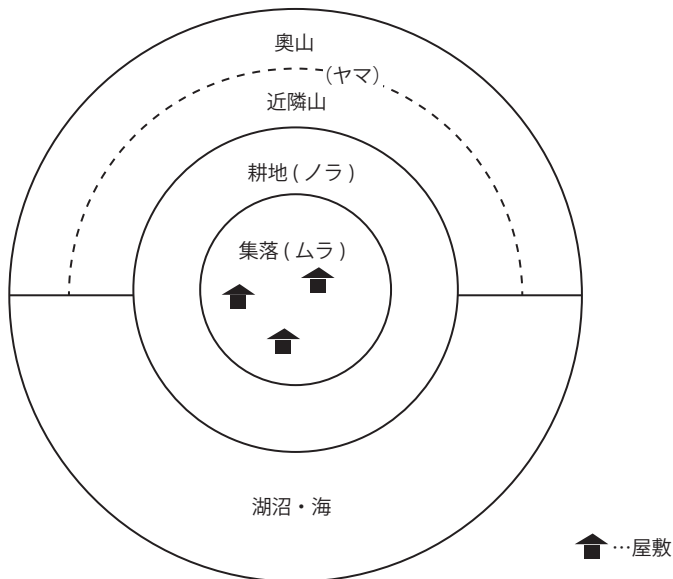


図1 村落領域のモデル

ろに立地するのもかも考えていきたいと思っています。

まず屋敷をどう認識するかです。集落があつた場所には屋敷があつたはず。人々が住んでいたのが当然なんです。それがなかなか見いだせませんでした。当時の建物形式としては地面に柱穴を据える掘立柱建物が主体だつたと考えられるので、こういったものの集合体をまずは屋敷と認定してみました。

発掘調査をしても建物の柱の並びなどがうまく捉えられないことがかなり多く、全ての建物を検出できるような事例は皆無に近い状況の中で、ではどうかというのを次に考えたのですが、その中で注目したものの一つが柱穴です。これをピットと呼んでいます。こういったピットのまとまり、さらには竪穴状遺構とか地下式坑という集落を構成した遺構、そういったものも含めた遺構のまとまりに注目していこうと考えました。

そうした事例の一つとして、東京都豊島区の長崎神社周辺遺跡を挙げてみます。ここでは、掘立柱建物というものが調査報告では明確には提示されていなかったのですが、調査された範囲の中の3カ所において、ピットや井戸などが集中する範囲が見いだせました。おそらくそのようなところが屋敷の跡だと考えられ、そうした遺構群に注目することで、屋敷がどこにあったのかを捉えていくことにしました。

次に、集落形態の類型を考えてみますが、その前に、村落に暮らした人々の階層を確認しておきたいと思います。中世後期の村ですが、百姓中あるいは地下と呼ばれるような共同的な集団となつて形成されたものといわれていまして、その中には土豪と呼ばれるような上層階層と、平百

姓がいて、村の中でもそういった階層の差があったことが推測されるので、それらを踏まえて集落を考えてみる必要があります。

特に上層階級の屋敷については、敷地も広く規模の大きい掘立柱建物を伴うことを想定しました。実際、この後の話の中で取り上げていく本村遺跡や池子遺跡群^{ほじろ}などでも、そういった屋敷跡が見られます。それらは後ほど紹介したいと思います。

集落の形態が捉えられる遺跡を四つ抽出しました。それを基に中世後期の集落形態に分類をしました。それが図2です。これはあくまでも概念図だのご認識ください。

まず一つが本村型集落で、本村遺跡を指標にした集落形態です。一戸あるいは二戸、三戸の屋敷が一定の距離をもって分布する形態と規定しました。

二番目に松崎型集落です。これは松崎遺跡群というところで見つかった集落遺跡で、それを基に考えた集落形態です。一戸もしくは二戸程度の屋敷が一カ所にだけあるという形態です。

三番目に挙げました上野古屋敷型集落ですが、これは一つの場所に複数の屋敷が集まった形態になります。ただ、屋敷の戸数は集落によってまちまちで、十戸以上集まった大きなものから数戸程度のもので、いくつかのバリエーションがあるようです。

四番目の池子型集落は中核となる屋敷の集合体、上野古屋敷型の集落と似たような屋敷が集中する部分と、そこから派生していくつかの屋敷が点在する集落形態です。

以上の四つの集落形態に区分しました。

まず本村型集落です。これは埼玉県ふじみ野市にある集落遺跡です。この集落遺跡は、台地の

●（公開講演 1）

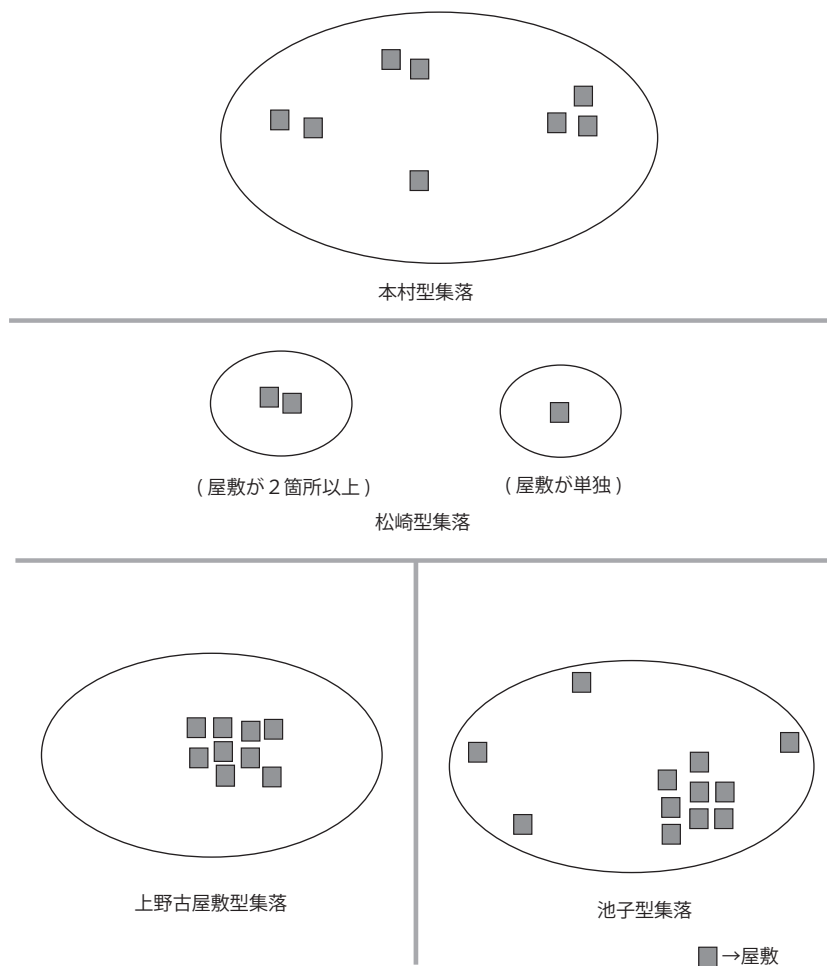


図2 集落類型概念図

上にいくつかの屋敷跡と考えられる遺構が見つかっています。図3に網掛けで濃くした部分が屋敷と考えられる場所です。こういったものが二戸あるいは三戸分布するような集落になります。

まず、中心部分です。24地点と84地点をクローズアップしてみます。そうすると、24地点では三つの屋敷が見いだせました。そこから40mくらい離れたところにもう一戸の屋敷がある。大きく見ると、四つの屋敷があるような形態がここでは見いだせます(図4)。

ここは掘立柱建物がいくつか抽出できたので、それを建物の軸線から見てみると、三つの時期に細分できることが考えられます。少なくとも三時期にわたる変遷をたどっていますので、一定期間、こういった場所に人々が住んでいたことが想定され



図3 本村遺跡の屋敷の位置

●（公開講演1）

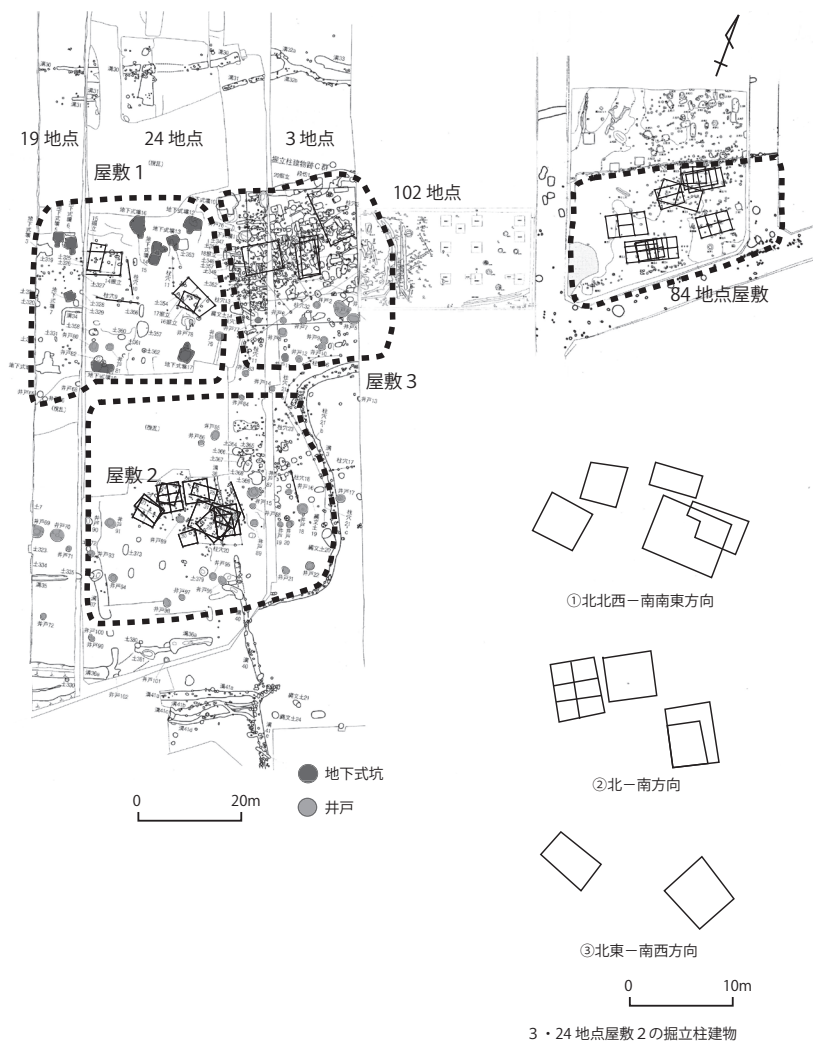


図4 本村遺跡3・24・84地点の屋敷

屋敷1～3及び84地点屋敷は大井町遺跡調査会2004

『本村遺跡Ⅲ 定禅寺跡Ⅱ 苗間東久保遺跡Ⅱ 大井氏館跡遺跡Ⅱ』に加筆

ます。

これは私が描いた下手な絵ですが、これは24地点の屋敷2です。この屋敷のこの時期、これをイメージ的に復元してみますと、こんなような感じになるのではないかと描いてみました（講演当日、スライドに入れた絵。紙数の都合で割愛）。これは検出された遺構のみをベースに作っていますので、実際にここに溝がめぐっていて、本来、屋敷を囲うような何かの施設、ここに簡単な柵があったようなことは分かります。

先ほど有力者の屋敷という話をしましたが、5・8・28地点、三つの地点が接したところ、遺跡の西のほうですが、この地点で大型の屋敷跡が見つかっています。この屋敷ですが、敷地面積は一六〇〇平米ほどでして、本村遺跡の中では最も大きい規模の屋敷になります。この地点にはいくつかの建物がありまして、大型の掘立柱建物が含まれることから、おそらくは有力な百姓層が暮らした屋敷と考えられます。

この集落を概念的に捉えればいくつかの屋敷がありまして、その間におそらく畠があるのではないかと想定しています。

こういった本村型の集落について、他に二つの事例を見ていききたいと思います。一つ目は白井屋敷遺跡です。千葉県佐倉市の遺跡です。台地の尾根上に集落があります。台地上に屋敷が三戸、あるいは一戸の屋敷があり、屋敷が本村遺跡のように一定の距離を保って分布する傾向が見て取れます。

もう一つ、千葉県成田市の小菅天神台Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡です。これも台地の上になるのですが、

先ほどの臼井屋跡遺跡と同じように尾根状になった台地の上に屋敷が分布する形態が見て取れる遺跡です。まず、北側の小菅天神台Ⅱ遺跡では三つの屋敷が少なくとも確認できます。そこから少し距離が離れて、小菅天神台Ⅰ遺跡ですが、ここでは一つの屋敷が見られる形態になります。先ほどの本村遺跡、あるいは臼井屋敷遺跡同様、屋敷が一定の距離をもつて分布する様相が見られます。

ここで本村型遺跡の特徴を少しまとめておきます。100 m 以上の間隔で、二戸から四戸、場合によっては一戸のこともあります。屋敷が散在する形態です。本村遺跡の場合、戦国時代の史料から大井郷にあったと推測され、この大井郷に永禄六（一五六三）年に出された史料には農地や空闲地という使われていない土地があることがうかがえます。

さらに耕地の中には荒地地、もともと耕地だったところから百姓がほかの場所に逃れた結果、放棄された場所が含まれていることがうかがえます。

この史料は、百姓中という百姓が集団化して団体になった村に対して戦国大名北条氏から出されたもので、こういった集落においても共同的な集団としてまとまった組織が想定されることが言えるかと思えます。

さらに、先ほど挙げたように一〇〇〇平米を超えるような敷地面積を持った大型の屋敷から、有力百姓が存在したことが考えられます。さらに、名主と呼ばれる有力な百姓が数人いたことが、永禄七（一五七九）年の史料からもうかがえます。

次に、二番目に挙げました松崎型集落について紹介していきたいと思います。この遺跡は千葉

県印西市に所在しています。台地の上の網のかかっている部分、これだけ広い範囲を調査しているのですが、実際に中世の屋敷跡が見つかったのは松崎Ⅲ遺跡と表示されている一カ所になります(図5・6)。

ここは屋敷が一カ所だけです。相当広い面積を調査しているのですが、実際に屋敷が見つかったのは一カ所で、そういった集落形態もあるだろうという想定し、松崎型集落を設定しました。松崎Ⅲ遺跡の場合は屋敷が一戸だったのですが、松崎型集落としても一つ千葉県四街道市の館ノ山遺跡を挙げます。ここでも台地の上をかなり広く調査されていますが、屋敷が見つかったのはこの部分だけです。ここでは二戸の屋敷が想定されます。

このように二つの事例を紹介しましたが、広い範囲の発掘を行っても屋敷が確認できるのは一カ所だけで、本村型集落のように集落が散在するような様子は認められないことが、この集落の特徴と言えると思います。

このように、屋敷の戸数が少ないことから、小規模な形態の集落と考えられます。こういった集落形態から、本村型集落やこの次に触れる上野古屋敷型集落のような共同体的な集団とは異なる少数の百姓からなる集落であったと思われます。

三番目に挙げました上野古屋敷型集落ですが、茨城県つくば市にある上野古屋敷遺跡を指標とした集落形態です(図7)。この集落の場合、太い線で囲った部分が屋敷でして、少なくともここでは十四カ所の屋敷地を見出すことができます。

似た類例として、千葉県横芝光町の新台遺跡があります。ここは屋敷の戸数は上野古屋敷遺跡



図5 松崎Ⅲ遺跡屋敷跡の位置

財団法人千葉県教育文化振興財団2006『松崎地区内陸工業団地造成整備埋蔵文化財調査報告書』に加筆

よりは少ないのですが、
台地の上に少なくとも四
つの屋敷、あるいはもう
少し戸数は増える可能性
はありますが、少なくと
も四戸以上の屋敷がある
ことがうかがえます。

つくば市の島名熊の山
遺跡も上野古屋敷型の集
落です(図8)。ここも
未調査の部分があるので
すが、少なくとも西側に
四戸の屋敷地があること
が確認されています、
未調査部分を含めるとも
う少し屋敷は増える可
能性があります。ここも一
カ所に屋敷が集中する形



図6 松崎Ⅲ遺跡の屋敷

財団法人千葉県教育文化振興財団2006『松崎地区内陸工業団地造成整備埋蔵文化財調査報告書』に加筆



図7 上野古屋敷遺跡

財団法人茨城県教育財団2007『上野古屋敷遺跡
—中根・金台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—』に加筆

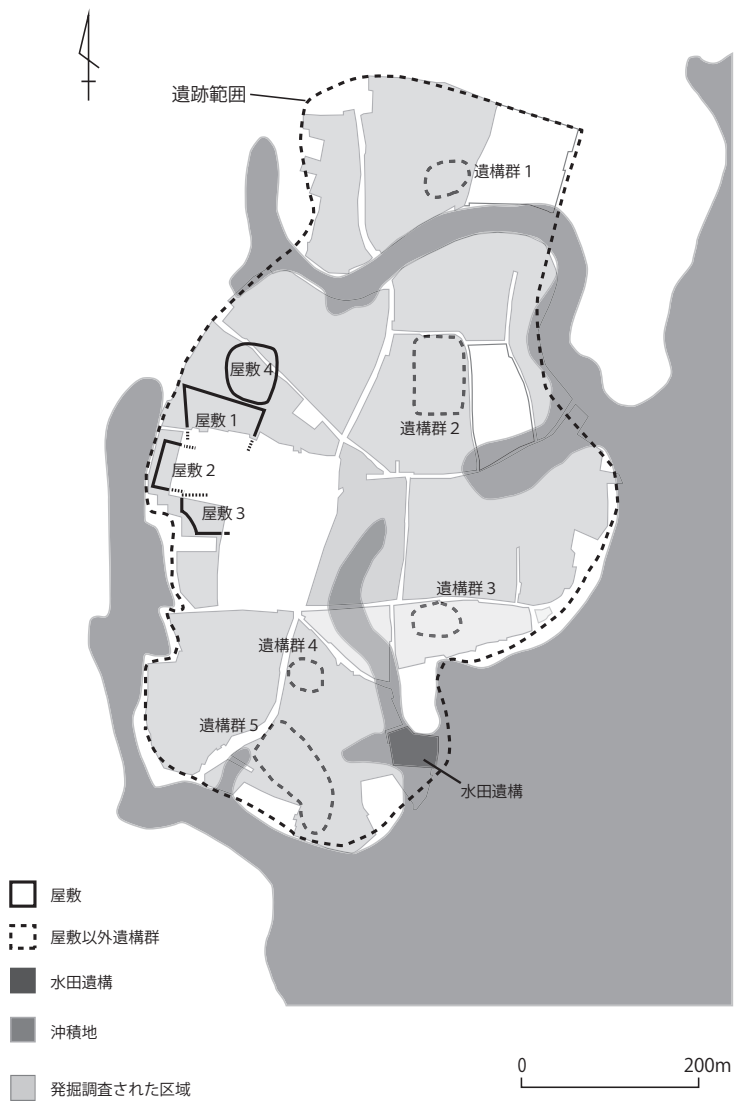


図 8 島名熊の山遺跡

態が見られます。

上野古屋敷型集落の特徴をここでまとめておきますと、複数の屋敷が一カ所に集まっています。屋敷の戸数に開きがあり、例えば上野古屋敷遺跡では十四戸の屋敷があるのに対しそれよりは少ない新台遺跡や島名熊の山遺跡とは、屋敷の戸数には違いがあるのですが、一カ所に集まっている形は共通した形態であると言えます。

このような屋敷が集合した様相から、百姓の共同的な集団の形成が考えられると思います。こういった共同体的な集団というのは、屋敷が一カ所に集まっていることから、屋敷地と耕地、畠や水田といったものの集約が図られた結果、こういった集落が形成されたと考えています。

四番目に挙げます池子型集落ですが、神奈川県逗子市の池子遺跡群を指標にした集落形態です。中世の前半期、十二世紀の後半くらいから十四世紀の前半くらいにかけて期間で、遺物が出土した地点に星印を付け、それから屋敷と考えられる場所を点で落としてみると、屋敷は一戸で、一戸が分散しています。遺物が出土した場所も各所に分散している状況が見取れます（図9右）。それが十四世紀後半以降になりますと、一つのところに屋敷が一定数まとまる場所があり、さらにそこから少し離れて、一戸の屋敷が分布する形態が見取れます（図9左）。

この遺跡の場合、旧河道、もともと谷間に流れている川があるのですが、その流路を一部人工的にかえているのです。そうしたことを十五世紀後半から十六世紀に行っています。おそらくある程度の人数が要る大規模な土木工事が必要だったと思うのですが、こういったことを行うには、やはり集団としてのまとまりがどうしても必要であったと思われます。中世後半になって、こう

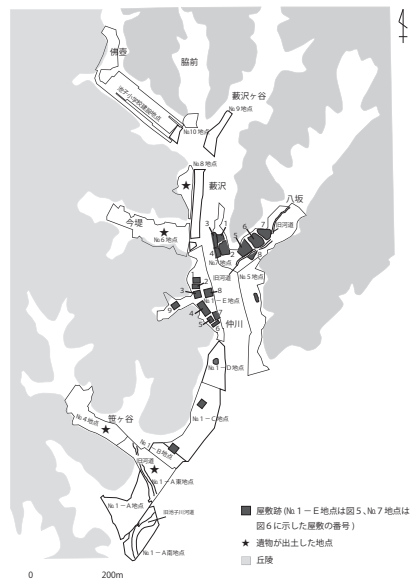
いったん灌漑用の河川改修を行える集団的なまとまりが形成されたことが、集落の形態から見えると思います。

先ほど、本村でも有力な百姓の存在について述べましたが、池子遺跡群の屋敷も敷地面積が比較的広いのがみられます。池子遺跡群の場合、谷間にある立地条件なので、人が住めるような土地がやや高い微高地に限られている中で、ある程度屋敷の専有面積をとれるということとは、やはりそれだけの有力な百姓がいた可能性があると言えると思います。

池子型集落の特徴についてまとめておきます。まず、先ほど三番目に挙げた上野古屋敷型集落のよ



13 世紀～14 世紀前半の屋敷跡と
12 世紀後半～14 世紀前半の遺物出土地点



14 世紀後半～16 世紀の屋敷跡・遺物出土地点

図9 池子遺跡群

うな複数の屋敷が集まった中核的な場所があり、そこから二戸や一戸の屋敷が派生した集落形態とまとめることができます。中核となる屋敷群は、上野古屋敷型集落のように百姓の共同的な集団の形成が考えられ、そこから離れて所在する数戸の屋敷は、耕地などの開発の拡大に伴って、派生的に形成されたものだと思えます。また、屋敷の規模が大きいものが集落の中にいて、こういう人たちが有力者として集落の中のリーダー的な役割を担ったと考えられます。その点は本村遺跡に似たような状況が見いだせます。

次に、冒頭で挙げたように集落が立地する地形にも着目してみたいと思います。関東平野の場合、集落が立地する地形は次の三つに区分できると思えます。一つが台地です。二番目に谷戸とか谷津と呼ばれる台地と台地の間にある谷の地形です。それから沖積低地、河川の氾濫原などのような場所です。こういった三つの地形に区分して考えてみたいと思います。

まず台地上に立地する集落形態としては本村型集落、松崎型集落、上野古屋敷型集落、この三つの形態が認められます。二番目の谷戸や谷津と呼ばれる場所では、松崎型集落や池子型集落が認められます。また、沖積低地においても池子型集落が見られます。

こういったそれぞれの集落形態ですが、それぞれの地域の地形に即して、暮らしや生業に有利な場所に集落が成立したことが考えられます。それぞれの地形の中で土地利用に適した集落形態が形成されていったと考えられます。

まず台地上に立地する集落として、本村型集落を紹介します。千葉県船橋市にある東中山台遺跡群と、谷を挟んで東側に印内台遺跡群という二つの遺跡群があります。線で囲った部分が調査

地点になります。かなりの発掘調査を行っているのですが、屋敷地が見つかったのはトーンを濃くした部分に限られ、本村型集落の一例と言えます（図10）。

こうした台地上に立地する集落の空間ですが、冒頭で概念図（図2）を示しましたが、本村遺跡を基にはかの事例も加味しますと、おそらくは集落には屋敷、耕作の収穫物を貯蔵する場、墓域、あるいは屋敷に付随する畠も想定されます。集落の周囲に台地上には畠が想定され、台地が開析された谷戸や谷津と呼ばれるよう谷地形がありますが、そういったところには水田が想定されます。さらに耕地の外側には山野が想定されます。概念的に示すと、図11のようになるのではないかと考えています。

屋敷を見出すのもなかなか難しいのですが、それ以上に難しいのが、水田や畠といった耕作地の跡です。そういったものが発掘で見つかることはなかなかないのですが、幸いにして、先ほど紹介した島名熊の山遺跡では、台地に面した沖積地の一部で水田遺構が見つかっていまして、こうした地形は支谷と呼ばれる小さな谷戸に相当し、このような場所で水稻耕作が行われていたことが確認できます（図8）。

それから、谷津や谷戸に立地する集落として、松崎型集落を紹介しておきます。東京都新宿区にある新宿六丁目遺跡です（図12）。北側が台地、土地が高いいところになって、台地に接した南側に谷状の地形があるのですが、この部分で3カ所の屋敷が見つっています。台地部分には、区画を意図したと思われる溝がめぐらされています。

この部分をクロースアップしますと、台地の部分には地下式坑と呼ばれる地面を掘り抜いた貯



図10 東中山台遺跡群、印内台遺跡群

蔵穴といった用途が想定される遺構が見つっている一方、低湿地側には井戸がいくつかありまして、ちょうど台地の一番裾の部分、低湿地との境目のあたりの微高地に掘立柱建物が見つかっていて、そこが屋敷になります（図12）。

新宿六丁目遺跡の空間的な構図を模式的に示しますと、この集落の場合、ちょうど谷戸の端部、台地に面した微高地上に集落があつて、谷戸がある低湿地側には水田が想定されます（図12 集落周辺の空間構造模式図）。実際、プラントオパールの分析によると、イネも検出されていて、おそらくはこの低湿地に面したほうで水稻耕作が行われていたのだろうと想定されます。

一方、台地側は、先ほど区画溝と述べましたが、人工的な溝があるということ、おそらく台地も何らかの土地利用をしていたことが想定され、林野としては山林資源を利用していたことが可能性の一つとして考えられると思います。

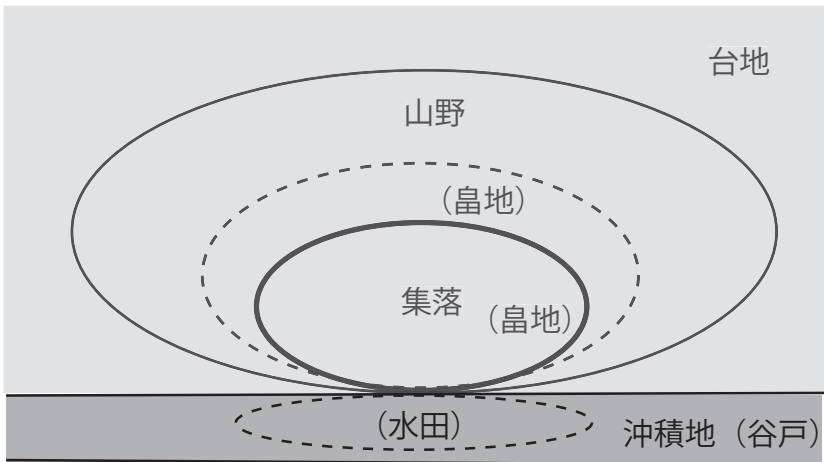
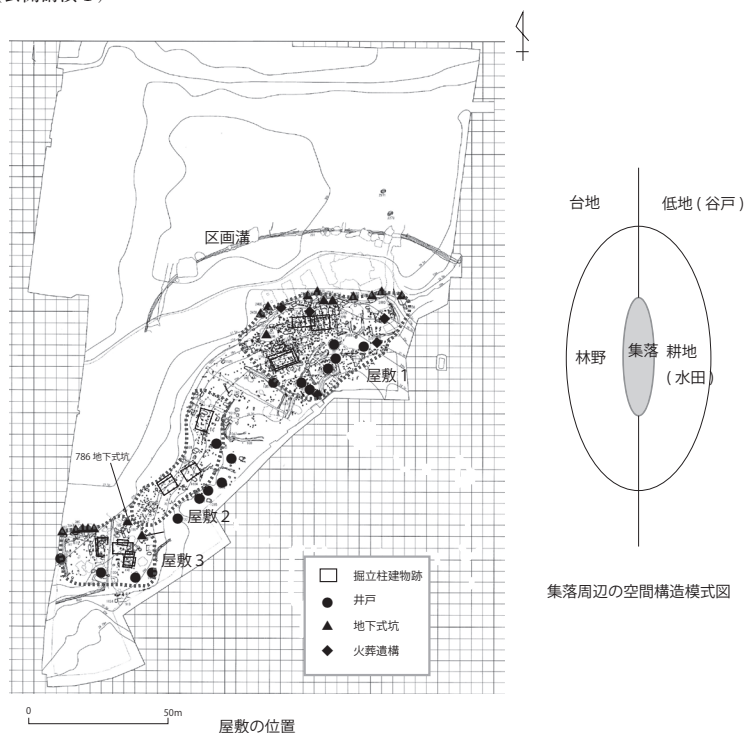


図11 本村遺跡周辺の空間模式図

●（公開講演 1）



財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター 2005
『新宿六丁目遺跡』に加筆

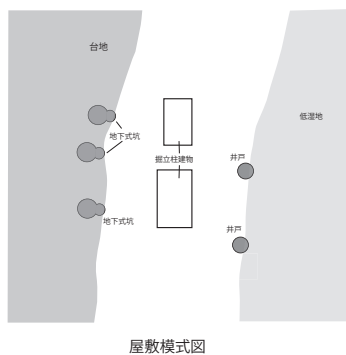


図12 新宿六丁目遺跡

それから三番目の沖積低地に立地する集落として、池子型集落を紹介します。まず、舟渡遺跡です。東京都板橋区にあります。これも集落の中に屋敷の集合体と考えられるようなものがあったて、そこから派生して一戸や二戸の屋敷地が分布する、池子遺跡群に似たような形態が見いだせます。

もう一つ、東京都葛飾区の上千葉遺跡です。中核部分になるところに屋敷の集合体があつて、そこから派生したところに一戸か二戸の屋敷がある形態が見いだせます。

以上のように、地形から集落を考えることもできます。

ここで少し視点を変えて、大名などの権力と村の関係も考えてみたいと思います。本村遺跡の所在する大井郷では、先ほども少しお話ししましたが、十六世紀の中ごろに、北条氏から荒地の再開発が命じられています。荒地はもともと耕作地だったのですが、百姓がほかの場所に逃れたことによって荒れてしまったために、そういった場所を再び耕地として再開発することを大名から求められたことが史料からうかがえます。

また、村の側も農業などの生業を維持することは自分たちが生活を続けていく上で必要であり、そうした自分たちの存立を図るために、大名権力に依存していたことが推定されます。一方、大名の側も村を存立させることは、年貢を得る上でも必要不可欠なことであり、領国支配の根幹を維持する上で必要であつたと考えられます。

東国の中世後期の集落形態の特徴をお話しして、まとめにしたいと思います。まず集落形態から見た特徴ですが、本村型集落や上野古屋敷型集落は、村が村請や自検団などを持ち、組織とし

て機能していく過程で形成された集落形態と考えられます。こういった集落形態は台地上で確認される事例が比較的多いと思います。

また、松崎型集落のような小規模な経営体である集落形態も見いだすことができます。さらに池子型集落ですが、こういった集落形態は谷戸や沖積低地のような開発の可能な土地が限られた地形環境の中で形成された集落形態であると考えられます。微高地と呼ばれる若干土地が高いところで開発を進める中で、こういったような集落形態が形成されていったと言えると思います。

村の在り方から見た集落の特徴は、時間の都合から簡単に触れましたが、村はただ単に百姓たちが暮らす集落として存在していたわけではなく、領主権力との相互の関係を維持することが必要であったと考えられます。とりわけその傾向は、十六世紀くらいになると顕著になっていくようです。例えば本村遺跡では、荒地の再開発が大名の北条氏から指示されていて、そういった状況からも、村と領主権力の関係が見て取れると思います。また大名の側も、村の存立を図ることは領国形成を維持する上で必要であったと想定されます。

最後に、中世後期の東国社会を村落、特に集落の視点から見ると、次のことが指摘できます。組織的な村の生成は農業などさまざまな生産を展開させ、領主権力の地域支配の秩序形成を促したと思われます。このような視点で、東国の中世の後期を支配者の側ではなく、村落あるいは集落の観点から見れば、百姓の連携による村の形成が生業の発展や領主権力の領国形成を進めた社会を成立させたとも考えることができると思います。

以上が本報告の結論になります。私の報告はこれで終わりにしたいと思います。ご清聴どうも

ありがとうございました。

松田 永越さん、ありがとうございました。